

竹之内裕文・浅原聡子編 (2016) 『喪失とともに生きる ——対話する死生学』ポラーノ出版

大賀有記

1. はじめに

本書は、医療・心理・宗教関係者が、支援現場で出会った人々とのかかわりを紹介し、それに対し哲学や民俗学等多様な分野の専門家がコメントを寄せるかたちでまとめられている。私たちは、喪失体験というと死別を思い浮かべることが多いかもしれない。しかし本書は「死別に限らず、人生は多くの喪失体験に満ちている」とし、人は生きている途中で大切なものを多々失うことを示し、私たちが「喪失とともに生きる」ことを理解する意義について語っている。以下、評者なりに本書の構成と概要について簡潔に述べた上で、ソーシャルワークとの関連においていくつかの論点に言及したい。

2. 本書の構成と概要

本書は、序章と、本章7章、終章を含めた全9章から成り立っている。

序章では、人生の過程では、大切な人との死別や病、仲間の裏切りといった数々の喪失体験があることに触れられている。喪失は私たちが生きている限り、様を変えて繰り返し現れる。だから私たちは喪失とともに生きていかなければならない状況にある。喪失とともに生きる必然性がある以上、そこに苦痛があり、その苦痛の緩和を私たちは希求する。その緩和方法が本書でいう「対話」である。

第1章では、看護師が小児病棟で体験した子どもとの死別、その家族の変化を通じて考えたことが紹介されている。例えば1か月という短い命であった場合、その子の存在を知る人は少なく、遺族は子どもとの思い出を誰とも分かち合えない気持ちになってしまうだろう、と述べられている。その子のことをともに語り合う存在として、グリーフカウンセラーとなった著者が役割を担って

いると記されている。

第2章は、小児科医が子どもの命を看取る体験である。著者は「自分の目の前で亡くなった子どもたちのことだけが、私の心の奥底にずっと溜まり続けています」とし、医療者として子どもの命が救えなかったことに伴うグリーフが表現されている。そして、子どもの死後何年たっても遺族と語りあうことで、互いに悲しみを緩和している様子について示されている。

第3章は、助産師が周産期医療の現場で直面した死産に関する体験である。小さな命が亡くなった事実ばかりでなく、妊娠の事実さえも、他者に知られることなく埋葬されることについてコメントが寄せられている。「生きる」ことは「生まれる」ことから始まるのではなく、「妊娠が明らかになった時点でその赤ちゃんは他者との関係を持ち始める」ため、妊娠した時点から命の存在は肯定されると述べられている。

第4章では、終末期ケアの現場における医師の体験である。ここでは、ある患者の言葉が紹介されている。「一生はお預かりしたいのちの営みであって、死ぬときは預かったいのちをきれいな状態で返さなきゃいけないんじゃないかと思うんです」と。つまり命は自然界のなかでつながれていくものであって、自分のもののようにもあるが、そうでもないということである。ここに寄せられたコメントでは「生まれることを人は選べない」のであれば「個人の主体的な選択の限界がある」とされている。そしてこの患者が「安楽死や自殺を退けている」点については、「安楽死や自殺を肯定する背景には思うままにならない『自分』であるならば、いっそいの方がよい」という発想があり、その意味ではその患者のいう「自然な形」に反すると指摘している。死んだら終わりですと死とともに自分の存在はなくなる、といった考えで

はなく、命のつながりといった大きな自然界の流れのなかで、命をとらえていくことが自然と人間との共生には必要であると指摘されている。

第5章は、「心休まる場所」であるホームを失い物理的な住処であるハウスも失った路上生活者に対する、僧侶の立場からの支援体験である。路上生活者は、ホームやハウスの他に、家族や仕事といったものも失い、文字通り身体も心も置き場がないことが示されている。仏教の観点からは、この世に満足のいく居場所はなく死後の居場所が真の居場所であるといえ、この世は仮の世に過ぎない。それを踏まえた上で、互いの「仮の」居場所を語り合うことが宗教者の役割と考えられている。

第6章は、リエゾン精神看護専門看護師ががんになった体験である。患者をサポートする専門性が高い看護師と自負していたところに、がんになり、身体的にも精神的にも職務の遂行が困難になった苦しみが記されている。また一方で、死が当たり前のものであることを気づき、死は怖いものではなく、誰にも公平に訪れるものとして、受け入れていく過程について語られている。ここに寄せられたコメントでは、人の尊厳に関連して「臥して生を問い、その考えを言葉に発することは、『流れ』の中で生きる人間の尊厳を確かめるために必要不可欠」とされている。

第7章では、母を自死によって亡くした人が自死遺族支援団体を設立したことについて紹介されている。そこでは自分を支えてもらった人々への恩返しだけでなく、恩を次世代に送っていかうという「恩送り」の気持ちがあるという。そしてグリーフケアが当たり前にある社会を目指しているとされる。ここに寄せられたコメントでは、「聴いてもらうことがケアの機能を果たすのは……、『あなただけ』の悲しみとそこに内包されている亡き人やものとの今もなお続く絆」が表現されるときとされている。

終章では、喪失は死だけではないこともふまえながら、生の有限性に触れ、私たちが生きている途中で手に入れたものはいずれすべて手放すことになることと述べている。生きることが出会うことであり、死ぬことが別れることであると仮にするならば、「死とともに生きる」ということは「いつか別れることを前提に他なるものやことに出会うこと」を意味していると解説している。そして「死とともに生きる」ということは、ただ一瞬一瞬を生きているだけであると結論づけている。

3. 本書の意義

自分自身の死は、すべてを失うことである。そうだと

すれば、それ以外の喪失は、自分自身を構成している一部を失うことといえよう。人生は喪失の連続であるから、喪失に伴う様々な感情や生活の変化とともに生きることが要求される。人間はいつか必ず死ぬため、私たちが今の瞬間に生きていることは奇跡的であるともいえる。私たちが人生の途中で大切なものをなくし続け、それでもなお生きていくことは、いつか自分自身の生を手放すための適応訓練ともいえるのではないか。生の営みと喪失体験の過程を結びつけて論じたところに本書の意義があるといえよう。

4. いくつかの論点

人生は思うとおりにはいかない。それでも人は、自分の人生を自分でなるべくコントロールしようとする。そして周りもそれを応援しようとする。そこには本人の自立や主体性の尊重等のソーシャルワークの理念が反映されているともいえる。そこでソーシャルワークの視点から以下の3つの論点を示したい。

1) 喪失との対話とソーシャルワーカーによる

グリーフケア

ソーシャルワークの現場には、虐待や社会的孤立等様々な喪失体験をした人々が現れる。例えば家庭内虐待により被虐待者が保護されれば家族とともに暮らすという環境を失うこともあるし、近隣や友人関係がうまくいかず社会的に孤立すれば自尊心の喪失を招くこともあるかもしれない。それら失ったものとの絆、つまり関係をクライアントが捉えなおすことは、ソーシャルワーカーとの対話、つまり面接を通じて可能かもしれない。すべてのソーシャルワーカーはクライアントの喪失体験に直面することから、喪失体験に伴う心理社会的支援であるグリーフケアを支援に意図的に活用することも検討すべきであろう。

2) 人生における本人の主体性の尊重

仮に命が自然界からの預かりものであるとするならば、少なくとも命が人に預けられている間はある程度のルールの上で、預かりうけた本人に命の運転の仕方、つまり人生の過ごし方は任されていると解釈するのが妥当ではないだろうか。そうでなければ、人生における主体性尊重の意義が説明しにくくなるからだ。例えば重い病気で余命わずかだと診断された場合において、本人が生に執着して最先端の医療を熱望し最期まで病氣と闘おうとするのも、緩和医療に徹し家族等大切な人々と残された日々を穏やかに過ごそうとするのも、その人の主体的な生き様であるといえる。ソーシャルワークは人の尊厳を守ろうとする。だからこそ、最期の瞬間まで命は能動的

な存在である「人」が運転するものであり、尊厳ある死に様は、その人の主体性が尊重された尊厳ある生の延長線上にあるといえる。命は誰のものかというよりも、むしろ、そもそも命は預かりうけたときから最期まで誰が責任をもって運転すべきか、自然界との関連や生命倫理も含めて考えていくべき課題である。

3) 死生学とソーシャルワーク

人の尊厳ある生のプロセスを支援するのがソーシャルワークである。生を考えると、人生や生活、生命の質、また生の延長線上の死を考える。もちろん支援目的等によっては、死まで考えなくても当座の支援はできるのかもしれない。私たちソーシャルワーカーは、たいていの場合、その人の人生のプロセスのほんの一部にしか関わらないと思っているからだ。しかし次の瞬間、クライアントは事故や震災、病気等で生の営みを突如終えて

しまうかもしれない。もし、本書のように生きていること自体が奇跡的ということであれば、いつ終わるかもしれない生の一瞬一瞬を営むクライアント全員に対して、ソーシャルワーカーは尊厳ある死を念頭にした尊厳ある生の支援をより意識的に行うことができるのではないか。死生学は、ソーシャルワークに生の捉え方という根源的な問いを与えてくれているといえる。ソーシャルワークにおける生と死について、その支援の基盤となる哲学的思考について深めていく必要は大きいだろう。

5. おわりに

本書は具体的な事例をもとに、分かりやすく書かれている。対人援助を行う人々には広く読んでいただきたい本である。